

目的 北方少数民族の一つ、ウイルトタ（オロッコ）には、シベリヤ大陸のツングース系民族によく見られる「アムール河流域紋様」とも呼ばれる紋様がある。この民族の歴史にも非常に関心をもったのであるが、それ以上に、伝承されている紋様を刺す刺し方と、その色彩の美しさに、民族の文化としての民族的美を感じるのである。今回は、ウイルトタ紋様の刺し方について報告する。

方法 文字をもたない民族であるため、刺繍に関して資料となる文献がない。故に、戦後、サハリンから引き揚げ、北海道に住むウイルトタの婦人に、その伝統的手法を伝授していただき、実際に実物製作をした上、残存しているものを調査し比較した。

結果 ウイルトタ紋様〔イルガ〕は、トナカイの皮に伝統的な紋様を絹糸で刺繍するということが特徴であるが、現在、トナカイの皮を得ることが困難であることから、フェルト等の布に刺している。その技術は非常に高度であり、色彩は大陸的で明かるく、おおらかな民族性をよく表わしている。一見、フランス刺繍に用いられるチェーンステッチとクロスステッチで刺してある様に思われる刺し方は、クロスステッチではなく、チェーンステッチのバリエーションであることがわかった。文字を持たないウイルトタは、図案化し記録することを知らなかつた為、下絵を書かず、一枚一枚直接刺してゆく、この方法は二枚と同じものが出来なかつたのである。フランス刺繍や日本刺繍等他の刺繍との違いは、指ヌキと針の運び方にもみられる。今後、他の民族との関わり等、広がりをもって調査し、研究を続けたいと考えている。